



国際保健のフィールドを通して学んだこと

国立国際医療研究センター 国際医療協力局

国際臨床フェロー 島田 真実

2011年3月、東日本大震災が起きた直後に、私はアフリカ南部にあるザンビア共和国の地に降り立った。当時医学部3年生だった私は、春休みの期間を利用して、日本のTICOというNGO団体が建設したザンビアの診療所を訪問する計画を立てていた。既に仲間の一部が現地での活動を開始していたため、停電が続く中、空港近くのホテルに前泊し、予定通り出国した。震災後の不安が募る中で、出会ったザンビアの方々はとても温かく迎え入れて下さり、「日本は大きな地震があったと聞きましたが、大丈夫ですか？」と、遠く離れた地でも日本の事を心配し、思いやる声を掛けてくれた事に驚くと共に、不安な気持ちが溶けたのを今でも覚えている。ホームステイをした家で、日が沈むと同時に、暗くなった部屋の中で大家族で食事を囲み、貴重な米を我々日本人のために炊き、もてなしてくれた事は今でも忘れられず、その時の光景が目に焼き付いている。電気も水道も当たり前の様に使っていた日本での生活を考え直すと共に、いつかはこの国のために何か恩返しが出来たら、という気持ちを抱いた。

TVの中の映像を通してそれまで描いていた途上国のイメージが、ザンビアでの経験を通じてより具体的となり、国際保健に対する興味が強まった。インドやベトナムでのボランティアの経験、また、ザンビアへ行くきっかけとなった国際医学生連盟という団体での活動を通じて、学生なりに国際保健に関して学んだ。その後、国家試験に向けた勉強や初期研修の期間を経て、国際保健に携わる機会は一時的にいたが、途上国での経験が忘れられず、医師になった今、自分が学生の時に抱いた気持ちを思い起こし、国際保健にもう一度関わりたいと感じた。臨床医として専門医取得のための研修を受けながら、

国際保健を勉強出来る環境に憧れ、国際臨床レジデントプログラム（現在は卒後6年目以降を対象としたフェロープログラムのみ）に応募した。晴れて2016年4月より当プログラムでの研修を開始し、3年間小児科で臨床経験を積むと共に、年に1度、国際保健のフィールドで勉強する機会を得た。そして、専門医研修を修了した今年度は、国際臨床フェローとして国際医療協力局に所属し、1年間を通じて国際保健に関する研修を行っている。

これまで当局で様々な活動を経験させて頂き、国際保健分野の知見を深めると共に、医師として大きく成長する事が出来たのではないかと感じている。経験させて頂いた中で、特に印象深かった2つの活動を紹介したい。

1つ目は、ザンビアでの活動であり、JICA長期専門家として派遣されている当局スタッフの元で、非感染性疾患(NCD)に関する活動支援を主に行った。このプロジェクトでは、ユニバーサルヘルスカバレッジ(UHC)の達成に向けて、効果的で質の高い基礎的保健サービスへのアクセスが向上するという目標の元、地域の情報を収集分析し、課題に応じたサービス提供に関わる管理能力を強化する取り組みを行っていた。レジデント2年目だった私は、小児科医として思い描いた通りに成長出来ていない自分に不甲斐無さを感じ、臨床医として続けていく自信を失いかけていた時期だった。学生以来、約6年ぶりに訪れたザンビアは、昔の記憶のまま変わらない人々の温かさや自然の風景と、発展と共に変化した都市部の光景が混在しており、空港に降り立った瞬間から、張り詰めていた気持ちが当時と同じようにして溶けていくのを感じた。1ヶ月間の活動期間を通じて、対象州において、課題である心血管疾患と



ザンビアで調査員と共にヘルスポストを訪問

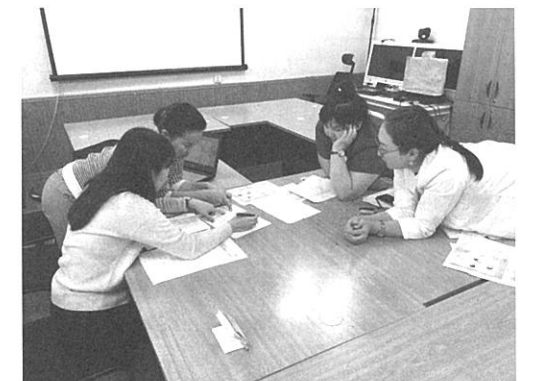
糖尿病に関するパフォーマンスを評価するため、実際にヘルスポストを訪問し、診療に役立てるフローチャートを掲示するなどの介入を行った。舗装されていない陸路を数時間かけて車で移動し、現場に何度も足を運び、現地のスタッフの声を聞く事で、現状を評価し解決策を考えるというプロセスを学んだ事は貴重な経験だった。壊れてしまう、使い方が分からない等の理由で、使用されないまま置かれている医療機器を目の当たりにし、単なる物資提供ではなく、技術指導などの持続可能な方法を考える事の大切さを学んだのもこの活動であった。学生の頃に訪れたザンビアで再び医師として活動出来た事は感慨深く、臨床医としてこれまで学んで来た経験があったからこそ活かされた視点があり、今後も続けていく自信を取り戻す事が出来た。

2つ目には、今年度秋に経験したモンゴルでの活動である。JICA長期専門家として派遣された当局スタッフの元で、乳幼児の運動発達評価に関するマニュアルの開発支援を行った。モンゴルでは小児診療における課題の一つに、脳性麻痺等の発達障害児に対する早期発見・早期治療が挙げられる。課題解決のためには、地域の医療者が乳幼児の発達を適切に評価し、高次医療施設へ紹介出来る事が重要である。地域の医療者が簡易的に使用出来る乳幼児の発達評価マニュアルの開発に向けて、カウンターパートである母子保健センターの医師と協議をし、日本の小児科医としての立場から技術支援を行った。途中、活動を妨げるような想定外の出来事が生じながらも、諦めずに試行錯誤を重ねる事で作業が進み、計2回の派遣を経てマニュアルのドラフトを完成まで近づける事が出来た。この活動を通じて、通訳を介して異なる言語でコミュニケーションを取り、共

通理解を得て、目標に向かってカウンターパートの活動をファシリテートする方法を経験した。また、活動の許諾を得るための幹部との面談や、関係機関との協議、事前調査など、活動をスムーズに進めるためのプロセスを学んだ。小児科医として過去3年間で培った経験を活かした技術支援を行う事が出来、大きな達成感と今後の自信へ繋がる経験となった。

上記の他にも様々な活動に関わらせて頂き、この4年間で国際保健に関する多くの経験を積む事が出来た。協力局での研修を通じて、国外では、フィールドで活躍される専門家の方々から現場を通して、また国内では、様々な専門的経験のバックグラウンドを持つ方々から、派遣前後の検討会・報告会や勉強会等を通じて、沢山ご指導頂き学びを深める事が出来た。臨床現場での研修と共に、若い学年でも指導を受けながら、国際保健分野の経験を主体的に積む事が出来る本プログラムだったからこそ、臨床と国際協力という2つの面から、医師として学び大きく成長する事が出来たと思う。どこの国のどんな場所であっても、現地の人々の気持ちを尊重し、現場に寄り添った支援を行う事、同じ目標に向かって共に歩む事を、身を持って学んだ経験は、この先ずっと自分の中で生き続けるだろう。

学生時代にザンビアで抱いた気持ちを忘れず、より具体的に、国際保健分野での様々な働き方を知る事が出来た今は、今後の医師としてのキャリアをより明確に自信を持ってイメージする事が出来るようになった。本研修に関わりご指導下さった全ての方々へ感謝すると共に、今後もこの研修制度を通じて、一人でも多くの人が国際保健へ抱いた想いを実現し、未来を描いて行って欲しい。



モンゴルの母子保健センターで行ったマニュアル開発会議